

## 英語圏児童文学会 第 50 回研究大会 発表要旨

**会場 A** 司会：杉村使乃（共立女子大学）

**発表 1** 「*The Tulip Touch* の語りから見る Natalie 像と一人称回想型の意義」  
海老塚日菜子（日本女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士課程）

Anne Fine 作、*The Tulip Touch* (1996) は主人公 Natalie とその友人 Tulip の特殊な友情物語である。作中では Tulip の非行やそこから垣間見える残虐性が中心に描かれているため、本作は荒れた家庭環境で育つかわいそうな Tulip と、そんな子と一緒にいてあげるいい子な「私」の最終的に破綻する友情物語として捉えられ、主に Tulip に見られるような子どもの心の闇をリアルに描いた作品と評価されることが多い。

しかし、本作の語り手は Natalie である。確かに、作中で Natalie が自分の考えを顕にすることは少ない。大半が自分から見た Tulip を語ることに徹底しているため、読者は語り手の Natalie に意思があることを忘れ、語り手が透明であると勘違いをしてしまう。だが、Natalie の語りを追うことで明らかに自分に都合が良いように恣意的に語りを操作していることがわかる。また、本作の語りはある時点から過去を思い返す回想の形で語られている。Natalie が恣意的な語りの操作を行ったのも、友情の結末を語り手の Natalie が語る時点ですでに知っていたからではないか。

本発表では Natalie の語りの操作を分析し、その操作を行う理由を検討することで Natalie が隠したい、もしくは直視できていない Natalie 自身の心の闇を探る。加えて、本作を一人称語りの回想型で描くことの意義をその効果から分析する。

**発表 2** 「戦争を描いた児童文学としての *The Machine-Gunners* : 日英における受容の比較」

瀧内陽（愛知県立大学）

本発表では、Robert Westall (1929-1993) の *The Machine-Gunners* (1975) の、イギリスと日本における受容を比較分析する。*The Machine-Gunners* は、日本では、1980 年に越智道雄の翻訳により『“機関銃要塞”の少年たち』として出版された。第二次世界大戦中の北東イングランドを舞台にしたこの作品は、日本では、戦争児童文学として注目を集めてきた傾向があるが、イギリスでは、出版当初は、戦争を描いたこと自体はあまり注目されず、むしろ 2000 年以降に第二次世界大戦を描いた作品として論じられることが増えた。本発表では、戦争を描いた児童文学として *The Machine-Gunners* が日英の児童文学批評家、研究者、翻訳家等の児童文学関係者にどのように受容されたのかを比較分析する。

イギリスでは、日本とは異なり、第二次世界大戦を舞台にした作品が反戦メッセージを前面に打ち出すことは少ない。*The Machine-Gunners* も、戦争を描くこと自体や反戦を訴えるのではなく、Westall が体験した第二次世界大戦中の子どもの日常、そして十代前半の子ども達を現実的に描くことに主眼がおかれている。また、*The Machine-Gunners* にはイギリスの正義を疑わない愛

国少年達が描かれている。こうした点について、児童文学関係者の作品理解は、イギリスと日本で大きく異なったわけではない。しかし、イギリスと日本の児童文学が異なる歴史と特徴をもっていたために、そこから導き出される評価には異なる傾向が生じた。

**発表3** 「自由を楽しむ子どもたち——『宝さがしの子どもたち』における読書とお金」  
牟田有紀子（城西大学助教）

イーディス・ネズビット（Edith Nesbit, 1886-1924）は児童文学に「新しさ」をもたらした作家である。ネズビットの「新しさ」に関する批評は、エブリデイ・マジックやタイムトラベルの確立と発展に焦点を当てる傾向にあるが、『宝さがしの子どもたち』（*The Story of the Treasure Seekers*, 1899）もまた、ヴィクトリア朝期児童文学でしばしば用いられた設定を使いつつも教訓主義に回収されないという点に於いて「新しい」物語であったと言える。

特に、子どもたちの読書とお金への態度を検証すると、母の死と父の事業の失敗により、精神的・経済的保護を失ったはずの子どもたちが、不自由を克服しようと奮闘しているというよりむしろ自由を謳歌している姿が浮かび上がる。バスタブル家の子どもたちは読書からお金を手に入れる方法を編み出し、同時に彼らも読み物に騙され、一家の再興のために集めたはずのお金を目先の欲のためにすぐに使い切ってしまう。彼らは家族のため、他者のためではなく、徹底して自分たちの楽しみのために持てる資源を使い果たすのである。

本発表では、このような子どもたちの読書とお金への態度を手掛かりとしてネズビットの試みを表出させ、リアリズム小説作家としてのネズビットの再評価の糸口を探りたい。

**会場B** 司会：鈴木宏枝（神奈川大学）

**発表4** 「Twistedという本流——『ディズニー ツイステッドワンダーランド』におけるヴィランズの表象」

熊谷めぐみ（立教大学大学院文学研究科英米文学専攻博士課程後期）

『眠れる森の美女』（1959）のヴィラン（悪役）であるマレフィセントを主役にした映画『マレフィセント』（2014）や、ヴィランズの子供たちが主役のディズニー・チャンネル・オリジナル映画『ディセンダント』（2015）など、近年のディズニー作品ではヴィランズを主役にした物語が多く制作され、人気を博している。大ヒットした『アナと雪の女王』（2013）の主役の一人エルサもまた、作品世界に脅威を与える存在という意味ではヴィランズの要素を併せ持ったキャラクターであり、多様性と複雑さを持った世界観の模索やディズニー作品のヒロイン像の変化なども相まって、ディズニー作品におけるヴィランズの存在感はこれまでにないほど増している。また、これらの作品はすべてシリーズ化されており、ヴィランズ側から描かれた物語が広く受容されていることを物語っている。

そのような流れの中で、2020年3月に日本でリリースされたスマートフォン向けゲームアプリ『ディズニー ツイステッドワンダーランド』は、漫画家の枢やなが原案やメインシナリオを手掛け、ディズニー映画のヴィランズたちにインスパイアされたキャラクターが活躍する作品である。

女性キャラクターが主役となることの多い近年のヴィランズを主役とした作品の中で、魔法士養成学校である男子校を舞台にし、男性キャラクターたちに焦点を当てた本作は異色であり、独自の解釈が付与された作品となっている。

本発表では、近年のヴィランズを主役にしたディズニー作品のヴィランズの表象を確認しながら、『ディズニー ツイステッドワンダーランド』においてヴィランズがどのように解釈され、表象されているか、元になったディズニー映画のキャラクターとも比較しながら分析する。

#### 発表5 「キャリア小説として読む<エミリーブックス>：主人公は何を乗り越えるのか」 清水友理（日本女子大学大学院人間生活学研究所人間発達学専攻博士課程）

ルーシー・モード・モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery 1874-1942）の<エミリーブックス>は、孤児の少女エミリーを主人公とした『可愛いエミリー』（*Emily of New Moon* 1923）、『エミリーはのぼる』（*Emily Climbs* 1925）、『エミリーの求めるもの』（*Emily's Quest* 1927）の三作品からなるシリーズである。本作の最大の特徴の1つは、主人公のエミリーが“ものをかく”ことに対して並々ならぬ情熱を燃やし、作家になるという明確なキャリアゴールを持つ少女として描かれている点だ。そのため本作では、父親を亡くしたことによって保護を喪失したエミリーが、母方の親族に引き取られてアイデンティティを構築していき、最終的には自らの伴侶を獲得するという典型的な孤児物語の展開と、“作家になると決意する”，“自身の創作の拠点を決める”，“初めての本を出版する”などといった、エミリーの作家としてのキャリア形成の過程が同じだけの比重をもって描かれている。

英語圏の児童文学においてキャリア小説（Career Novel）が登場したのは一般的には1936年とされている。けれども作家というアルプスの道の頂上を目指し、投稿を続けるエミリーには、“特定の職業を目指し必要な技能の獲得に励む”というキャリア小説の主人公の要素が備わっていると考えられる。そこで本発表では、<エミリーブックス>をキャリア小説として再読することを試みる。特にエミリーがキャリアを獲得するにあたって何を乗り越えなければならなかったのかという点に着目し、彼女の葛藤や成長を捉え直す。さらに逆説的ではあるが、この試みによって<エミリーブックス>をキャリア小説の萌芽が認められる作品として位置づけたい。

#### 発表6 「*The Hundred and One Dalmatians* と *The Starlight Barking* におけるもの言うイヌと他者の関係」

若谷苑子（白百合女子大学大学院文学研究科児童文学専攻博士課程後期）

Dodie Smith による *The Hundred and One Dalmatians* とその続編にあたる *The Starlight Barking* は、英国に暮らすイヌの物語である。物語の中心的存在である Dearly 夫妻に飼われるダルメシアン夫婦 Pongo と Missis をはじめ、登場するイヌは皆もの言う動物であるが、人間の言葉を話すことはできない。人間もイヌの言葉を完全には理解できず、イヌの言葉を話すことはできない。この意味では、作中に描かれるイヌと人間の関係は読者が生きる世界、すなわち現実と非常に近いと言える。

この物語では、英国のイヌは共通の考え方や独自の情報伝達手段を持っている。例えば、イヌたちは人間を「ペット」、自分たちをその「飼い主」として認識していたり、遠吠えという情報伝達手

段によって、英国中のイヌたちは Pongo と Missis の誘拐された仔イヌたちの情報をやりとりしたりする。*Starlight Barking* では、例外はいるものの、イヌ以外の動物が眠りについてしまう。人間以外の動物はイヌと話すことができ、イヌに協力するという場面もあるが、もの言うイヌと、人間を含むその他の動物の間には、基本的に明確な一線が引かれているのである。

本発表では、*The Hundred and One Dalmatians* と *The Starlight Barking* を研究対象とし、第一にイヌと人間の間を、第二にイヌと人間以外の動物との関係を考察する。それらを踏まえて、第三に、例外としてイヌの仲間として受け入れられたイヌ以外の動物についての考察を行い、二作品において描かれるもの言うイヌと他者の関係を読解する。

**会場 C** 司会：菱田信彦（川村学園女子大学）

**発表 7** 「Penelope Lively の作品における場所、歴史、継続性」  
磯部理美（一橋大学大学院博士後期課程）

Penelope Lively (1933-) は、カーネギー賞受賞作の *The Ghost of Thomas Kempe* (1973) やブッカー賞受賞作の *Moon Tiger* (1987) をはじめとして高い評価を得ている作家であり、「歴史」あるいは過去から現在への「継続性」をテーマとした作品を多数生み出していることでも知られている。本発表では、Lively の作品において過去の記憶の伝達手段としての役割を担っている「場所」の重要性、さらにそこで叙述される「歴史」および「継続性」という Lively 作品の核心となっているテーマを中心に、Lively のテキストを分析する。たとえば、Lively の作品の中でもしばしば実験的作品として語られる *The Driftway* (1972) では、古くからある道を舞台として、主人公の Paul が過去の人びとの “messages” を聴く体験を通して内面的成長を遂げる様子が描かれる。歴史をもつ特定の場所を舞台として時間を超えた記憶の伝達を描く本作における独特な歴史叙述は、Lively の作品における「歴史」と「継続性」、またそれらに対する「場所」の役割を考える上での重要な一要素である。さらに本発表では、主人公の子どもの過去との出会いといった Lively 作品と同様のテーマをもつ作品との比較考察を含めて、Lively の作品の特質の一端を明らかにしたい。

**発表 8** 「ロアルド・ダールの児童文学作品におけるサードカルチャーキッズについての考察」

口田珠加（保育・介護・ビジネス名古屋専門学校）

Roald Dahl は、児童文学作品と大人向けの作品を両方発表したイギリスの小説家である。彼の出身地はイギリスだが、ルーツはノルウェーにあり、*The Witches* (1985) でも言及されている。昨今、このように外国にルーツのある子どものことをサードカルチャーキッズと呼び研究が進められている。児童文学作品の読者である子どもの中にも、Dahl のように異なる文化圏で育っていく場合が今後一層増えていく可能性が高い。本発表では、Dahl の自叙伝的な作品 *Boy: Tales of Childhood* (1984) を中心に彼がどのようにアイデンティティを構築したのかを考察していく。

はじめに Dahl 自身が描いた子ども達について分析を行う。Dahl の描く子どもは弱い立場から、悪役に立ち向かっていく姿が多く見受けられる。Dahl はなぜこのようなプロットを好んだのだろう

うか。Dahl の児童文学作品内の子ども達の特徴を比較し、*Boy: Tales of Childhood* (1984)中に出てくる彼の幼少期の体験と、彼の作品内における子ども像とを比べ分析する。

次に、Dahl の悪役の特徴について触れる。Dahl の作品には、暴力的かつ権力も経済力もある悪役が存在する。彼らは権力を逆手に取り理不尽な要求を主人公に突きつける。Dahl にとって悪役になりうる人物像の条件を Dahl の伝記にも触れながら考えていく。

さらに、Dahl が父母から受け継いだノルウェーのアイデンティティとイギリスに生まれ、学校教育では英国人として育てられたという複雑な体験がどのように作品内に影響しているか考察し、Dahl の描くサードカルチャーキッズに迫りたい。

## 発表9 「イギリス児童文学に描かれたディープエコロジー表象——Burgess, *The Cry of the Wolf*と Pearce, *The Little Gentleman*の場合——」

内藤 貴子 (日本女子大学学術研究員)

Melvin Burgess の *The Cry of the Wolf*, 1990 (『オオカミは歌う』神鳥統夫訳, 偕成社, 1994年) と Philippa Pearce の *The Little Gentleman*, 2004 (『川べの小さなモグラ紳士』猪熊葉子訳, 岩波書店, 2005年) は共通して、従来“害獣”として生存権を不当に侵害されてきた野生動物であり、なかでも伝説として語られる特別な一匹の個体を主人公に据え、人間の自然との関わり方を問い直す。

*The Cry of the Wolf* は、イギリス最後の生き残りのオオカミをハンターや王侯貴族が仕留め、原生自然の脅威の象徴を人間が制圧することを言祝ぐ“the last wolf legend”の極めて現代的な派生作品として、人間は生態系の最上位種であるという幻想を打ち砕く。旧来の人間中心主義を体現するハンターが死闘の末に敗北し、終には生命の循環のなかへと回帰していく鮮烈なイメージはディープエコロジー表象として読める。段階的に解放されていく使役動物の視点が導入されることによって、ハンターとオオカミとの狩り狩られる形勢の優劣が揺らぎ、巧みに平等化されていく語りの妙にも着目する。

言語の獲得や喪失、人間によって体系化された音楽の範疇の外側にある歌、身体性を通じた原生自然の経験など、両作品に共通するモチーフ分析も行う。*The Cry of the Wolf* でハンターが言葉を失い、海に呑み込まれる際にその身体が食物連鎖のなかへ取り込まれることや、オオカミが沈黙を守ること、歌うことは、*The Little Gentleman* で人間の女の子が小さく縮んだ身体で土のなかに下りて太古の歌を聴き、モグラを真に理解して我欲を手放すこと、人間の言葉を獲得したモグラが言葉を捨てたいと望み、人間の生活圏と隣接しながらも原生的である自然へと還り“wholly mole”に戻っていくモチーフと通じ合うからだ。トロフィーとペットという違いこそあれ両作品が言及する、野生動物を所有することにまつわる人間本位の葛藤もまた、エコロジカルな想像力の浅さを炙り出す。既存の価値観や思考の枠組みに捕らわれがちな大人の姿と、子どもの登場人物の描かれ方の違いにも触れる。